

第八四一回 平和祈念式

令和三年八月九日

平和坂・永井坂では、セミの鳴き声が響いています。きっと、七十六年前の今頃も、同じようなセミしぐれの中、青空が広がる暑い日だったのだろーと思ひます。

本日、城山小学校 第八四一回平和祈念式の挙行に際しましては、御多用な中に、長崎市教育委員会教育長 橋田慶信よしのぶ様並びに、参議院議員 秋野公造あきのこうぞう様を始め、多くの御来賓・地域の皆様の御参列を賜り、心から感謝申し上げます。また、育友会会長 松本光生みつお様を初め、役員の皆様の御支援に対しまして、深く感謝申し上げます。

今日の平和祈念式のために、二年生の皆さんが、献花用の花を持ってきてくれました。二年生の皆さん、ありがとうございます。た。

今から七十六年前の昭和二十年（一九四五年）八月九日、午前十一時二分、松山町上空五〇〇mで炸裂した一発の原子爆弾によって、多くの方の尊い命が奪われ、長崎の街は、大変な被害を受けました。幸せな日常生活が奪われ、人々の夢や希望、未来が無

残にも打ち砕かれました。突然、この世を去らなければならなかった無念の思いは想像を絶するものがあります。

原爆の被害を受けた方たちは、今でも体や心に傷を負い、七十六年という長きにわたって苦しんでおられます。

今の平和で豊かな長崎や日本は、先人の血のにじむような努力と皆さんのような子どもたちの未来を守ろうとする深い愛によって築かれてきたものです。

さて、皆さんは、「ひばくポンプ」という絵本を知っていますか？ 一年生の中には、この前、図書館司書の大島先生から読んでもらった人もいます。

この絵本を描いたのは、当時九歳の「児玉美空」さんという女の子です。美空さんのお母さんが通勤中に、JR広島駅近くの道端で、偶然見つけた古いポンプにかけられた札が、絵本ができるきっかけとなりました。

その札には、「被爆ポンプです。残してください」と書かれていました。美空さんは、お母さんの協力も得ながらポンプについて調べ、札を書いた「永原さん」という方を探し出すことができました。そして、原爆やポンプの歴史を調べて一冊の絵本にしたのです。

このポンプは、戦争前は生活用水として、戦争中は火事などを防ぐ水として、被爆後は、乾いたのどをうるおしてくれる命の水として活躍したポンプでした。その後、水は通らなくなり、再開発のために取り壊されるところでした。

永原さんは、ポンプが見つめてきた広島を歴史を忘れてはなら

ないという思いから、広島市に保存を訴えたそうです。

城山小学校にも、多くの被爆遺構があります。その中の一つである、体育館横の「カラスザンショウ」の木が、先日、平和祈念館に移設されました。

被爆しながらも、かろうじて生き残り、ムクノキと支え合って生きる姿が、平和の象徴として城山小の子どもたちや地域の方に愛され、大切にされてきたカラスザンショウですが、五年前に、完全に枯れていることが確認され、このままにしておけば、やがて、その姿が見られなくなる、消えていくために、保存処理をしたらうで、祈念館内に移されたのです。

私は、被爆ポンプの話、そしてカラスザンショウの移設には、共通した思いがあると感じています。それは、昨年四月にお亡くなりになった「内田伯（つかさ）さん」の言葉です。内田さんは、原爆殉難者慰霊会や平和発信協議会の会長をされ、本校の育友会会長も務められたこともありました。その当時、被爆校舎が取り壊されることになっていましたが、被爆校舎を残し、平和記念館にしようとして活動されました。おかげで、校舎の一部が残され、多くの方が訪れる平和記念館となりました。内田さんの言葉が、「目から消え去るものは、心からも消え去る」というものです。

戦争があったこと、原爆で大きな被害を受けたことを、私たちは決して忘れてはいけません。

私たちの城山小学校では、原爆で亡くなられた方々の御冥福を

祈り、二度と戦争はしない、核兵器は使わせません、平和な世界を私たちがつくりますという気持ちをも、毎月九日の平和祈念式で確認しています。

祈念式は、戦争が終わって六年後の八月九日に始まり、今日が八四一回目ですから、祈念式を始めてからの七〇年間、一度も欠かさずに積み重ねてきたということになります。

八月の初めに、長崎新聞社を通して、あるところから「折り鶴」が届きました。

今日は、その折り鶴が入った箱の包装紙を持ってきています。

（包装紙の紹介）

これが、その包装紙です。

日本から約九八〇〇キロメートル離れたイタリア北部の、ピアチェンツァ市立ゴッソレンゴ小学校の皆さんが、慣れない折り紙をして、平和を願う折り鶴を作り、城山小学校に贈ってくれたものです。

この活動のお世話をしてくださったのは、長崎市出身の声楽家である豊島文（あや）さんとマッシモ・ベルサーニさん夫妻です。

豊島さんはイタリアに移住して、夫のマッシモさんが原爆に関心をもったことや、御自身の子どもが通う学校で移民の子どもについて知ったことなどから、戦争や平和について考えるようになり、今まで以上に長崎のことを思うようになったそうです。

そうして、イタリアの学校で原爆のこと、平和のことを伝えるとともに、折り鶴作りを十数年に渡って続けてこられました。

今から六年ほど前にも城山小に折り鶴は贈られています。そのときのお礼として、「子らのみ魂よ」のDVDを渡したそうです。豊島さんがイタリアにもどり、子どもたちに聴かせると、「ぼくたちも歌おう」という声上がり、以来、「二度と過ちを繰り返さないように」と願いながらイタリアの子どもたちに「子らのみ魂よ」を教えていらっしゃいます。

城山小学校で歌い継がれてきた曲が、遠く離れたイタリアでも広がりを見せているなんて、すごいことだと思うと同時に、長年にわたって、被爆の継承と平和の発信を続けてきたことで、私たちの思いが確実に広がっていることに喜びを感じています。

「祈りの時間」であるこの祈念式のあと、六年生は原爆殉難者慰霊式に参加します。一年生から五年生までは、「ふりかえりの時間」として、祈念式を振り返ったり、それぞれの平和ゾーンにおいて学習を深めたりします。第三部は「祈りの共有の時間」として、長崎市の平和祈念式典を視聴します。今年は、五、六年の代表者が、式典において「子らのみ魂よ」の合唱を捧げることになっています。出演する皆さんには、城山小の代表として、しっかりと平和の思いを発信してきてもらいたいと思っています。

また、全校の皆さんには、今この時間や、このあとの時間で、皆さんの先輩になる方々の思いや願いを受け継ぎ、平和のために、自分には何ができるか、改めて考えてもらいたいと思います。

原爆の悲惨さを継承し、平和の尊さを世界に発信していくのは、城山小で学ぶ私たち一人一人の使命です。

「平和は城山から」を胸に、平和な未来を築くため、しっかりと学び、考え、そして、できることを続けていくことを皆さんと一緒にここに誓い、私の話を終わります。

令和三年八月九日

長崎市立城山小学校 校長 武末 弘之